

遠藤 暁及

危険な道楽、アースキャラバン(2)

一金髪のレジスタンス少女

→とらわれの身になったアヘド



■ パレスチナに現れた、 現代のジャンヌ・ダルク

銃を持った兵士がいきなり家に押入ろうとしたら、あなたはどうするだろうか？

大抵の人は諦めて無抵抗になるに違いない。どこの国の民衆もそうだ。

ナチスに連行されるユダヤ人もそうだった。日本兵に娘を連れて行かれる中国人もそうだった。ソ連兵に押し入れられる満州にいた日本人も、アメリカ兵に虐殺されるベトナム人もそうだった。

どこの国の民衆も、皆、ささやかな日常生活を送っている。武器と権力を持った兵士を相手に素手で闘おうと考える人間はまずいない。

しかしこの娘だけは違った。...、アヘド・タミミ。17才の高校生である。何と彼女は、銃を持って自宅に侵入しようとした兵士にピンタを食らわせ、蹴りまで入れたのである。それを聞けば、よほど女子プロレスラーみたいなゴツい女か、と思うかも知れない。しかし、間近で顔を見ると、まだあどけない少女である。

2017年12月、この時、アヘドはよほど怒っていたに違いない。その1時間ほど前、14才の従兄弟が催涙弾で顔を撃たれ、瀕死の重傷を負っていたのだから。

彼女の無我夢中の行動は成功した。銃を持った兵士が、すごすごと引き上げたのである。

SNSに投稿されたその映像は、またたく

間に世界に拡散され、アヘドは一躍、時の人となった。イスラエル占領軍に立ち向かう、パレスチナの金髪のレジスタンス少女として。

しかしその代償は高くついた。2日後の深夜3時、イスラエルの兵隊たちが彼女の家のドアを激しく叩き、家族は全員、叩き起こされた。そしてアヘドは連行されて行ったのである。

マスコミや政府に程よく洗脳されているイスラエル国民は、アヘドを“テロリスト！”と呼んで憎しみを募らせた。イスラエル国防相は、“あの娘を一生閉じ込めておけ！”と叫んだ。しかし、世界的な署名運動が行われ、アヘドは8ヶ月の軍事刑務所行きとなった。

■ 囚われの身のまま迎えた 17歳の誕生日

かつてナチスは、ユダヤ人の土地や財産を“合法的に”没収した。満州や朝鮮半島を占領支配した日本も同じだ。土地や財産を奪い、抵抗する民衆は容赦なく投獄し、拷問した。

現在、パレスチナを占領支配しているイスラエルは、ほぼ全く同じことをしている。驚くべきことに、この事実が大手メディアで報道されることはほぼない。

むしろメディアによって、“パレスチナ人はテロリスト”とい

うイメージが刷り込まれており、手ひどい風評被害に遭っているのである。

イスラエル占領下のパレスチナでは、全土のあらゆるところで農地や水源が奪われ、人間の生存が困難な状況にさせられつつある。

アヘドの住むこのナビサレ村の人々は、これに対して非暴力の抵抗運動を必死に行ってきた。それをイスラエルは、軍隊による一方的な暴力で応酬している。

例えば、4月にこの村に行ったとき、イスラエル兵は僕の目の前で、殺傷能力のある催涙弾やゴム弾を中高生相手に撃っていた。

イスラエル兵に撃たれて負傷したり死ぬパレスチナの子供たちは後をたたない。つい最近も、デーシャ難民キャンプで15才の少年が殺された。

この占領軍の特徴は、相手が子供であっても平気で撃つし、拉致して収容所に入れることである。これを一般の大手メディアでは、イスラエルとパレスチナの「対立」、「紛争」、あるいは「衝突」と言語変換して報道する。

これによって世界の人々は、あたかも軍隊同士の戦争であるかのように錯覚する。しかしその実態は、軍隊が銃で少年など丸腰の人間を撃っているに過ぎない。

■ お人好しのパレスチナ人たち

僕は4年ほど前から、アヘド・タミミの一族と関わりを持って来た。アヘドの叔母さんのマナルは、非暴力レジスタンス活動家の一人で、海外でも講演している。

これはパレスチナ人の特徴だが、一族の皆さん、お人好しである。余談になるが、例えばある日、2人の外国人がいきなり家にやって来て、ステーキが食べたいと言った。彼女は“ステーキはないけど...”と言って台所に立ち、あり合わせのもので食事を作って出した。

外国人は、“オレたちはステーキを食べたいのに...”と、文句を言いながらも出された料理を食べ、食事代を払おうとした。

しかし、これまたパレスチナ人の常で、マナルは無償で彼らをもてなすつもりだったから、お金の受け取りは固辞した。そこで外国人たちは、この家がレストランではないこ



イスラエル兵にピンタするアヘド(右) ↑

右頁下段へ続く

とに気づいたようだ。

マナルの息子たちは2人ともイスラエル兵に拉致され、今も尚、収容所に入れられている。いつ出してもらえるのかもわからない。

一族全体で7人もの子供たちが収容所所に閉じ込められている。絶望感を味あわせ、彼らの抵抗への意志をくじくためだ。

しかしそんな目に遭いながらも屈することなく、非暴力で占領軍の兵士に立ち向かっているのがタミミー族だ。

■ アヘドの曲と映像を 世界に公開できるか？

今夏、日本、カナダ、オーストリア、スペインから総勢33人の参加者を得て、アースキャラバン中東2018を行った。日本文化の提供、コンサート、土木工事、家の建設など、パレスチナ各地で様々な活動を行った。

その最終日、僕は映画監督の鈴木聡さんと2人でナビサレ村を訪問した。それは、アヘドをテーマに作曲した音楽と映像を彼女のお父さんに観せ、これを世界に公開する許可を得るためだった。

4月に会った時、この曲の歌詞をめぐるアヘドの父親バッセムとはすったもんだがあった。(このことはすでにブログに書いているので、詳細はここには書かないが)

果たしてバッセムから、そして、3日前にイスラエル軍事刑務所から解放されたばかりのアヘド本人からどんな反応が返って来るのだろうか？

再会の挨拶もそこそこに、”出来上がった曲を聞かせて欲しい”、とバッセムに言われた僕は、恐る恐る鈴木監督とノートパソコンを開いた。なにせ彼は、頑固親父なのだ。緊迫した僕らの胸は高鳴っていた。<続く>

■アヘドがイスラエル兵をビンタした時の

映像＝「少女が兵士の顔をたたいたのはテロかヨルダン川西岸の村で」 - YouTube 検索
<https://www.youtube.com/watch?v=qrBLi8srD-k>

■「パレスチナで今、一番ホットな村に向かう」 <https://goo.gl/Ap661Y>

■ブログ(下記から3回に亘ってナビサレ村に行った時のことを記している)

<https://endo-ryokyu.com/2018/05/14/パレスチナで今、一番ホットな村に向かう/>



僕らと会ったとき。体調が戻らず、むくみが痛々しかった。アヘド↑